



第 15 号

2016 年 3 月 15 日

設立五周年記念定期総会記念講演

二宮金次郎

講師

植田心壮氏

忠臣蔵

講師

山本博文氏

設立五周年を迎えた岡山歴史研究会の平成二八年度定期総会を下記案内の通り開催致します。

記念講演として、「現地探訪 二宮金次郎は生きている」「忠臣蔵の真実—何のために討ち入ったか?」(仮題)の二題を予定しています。

「現地探訪 二宮金次郎は生きている」の講師は、植田心壮氏です。同氏は教職をへて、元岡山市立オリエント美術館長。岡山歴研設立当初からの会員です。同氏は昨年、『現地探訪 二宮金次郎は生きている』を著書を出版されました。

「忠臣蔵の真実—何のために討ち

定期総会で
会費値上を提案
(年会費 三千円)

入ったか?」(仮題)の講師は、山

本博文氏です。同氏は県立津山高
学校の卒業生で東京大学史料編纂所
の教授。近世が専門で、『忠臣蔵』
について造詣が深く、NHK番組「先
人たちの底力 智恵泉(ちえいず)」
で年末の風物詩『忠臣蔵』には必ず
登場され、おなじみです。

①岡山出身四名と岡山藩士縁者二
名が赤穂義士、②足守藩主・木下公
定が赤穂城収城使、③浅野内匠頭終
焉地・一関藩上屋敷は岡山藩中屋敷
のすぐ近く、などの事実があります。
赤穂・岡山両藩の「縁」についても
話があるのでは、と期待されます。

平成 28 年度定期総会のご案内

日時 4 月 29 日 (祝日) 受付 12 時 15 分

場所 山陽新聞さん太ホール

総会 12 時 45 分～

平成 27 年度の事業、決算報告。

新年度の事業計画、予算、役員改選

会則附則の改正 (会費の変更)

記念講演 13 時 30 分～

「現地探訪 二宮金次郎は生きている」

講師 植田心壮氏 (当会会員)

記念講演 15 時 10 分～

「忠臣蔵の真実—彼らは

何のために討ち入ったのか」(仮題)

講師 山本博文氏 (東京大学教授)

参加費 500 円

歴研
展望

備前平野に春を呼ぶと
言われている西大寺会陽
は今回第五〇七会として
開催されましたが、今回

は国の重要無形民俗文化財に指定決定
となつて最初の会でありました。

五百年以上前に始まつた裸祭も日
本三大奇祭と言われる伝統行事になつ
ております。ちなみに三大奇祭と言わ
れているのは、「島田大祭帯祭」「西大
寺会陽」「岩手黒石寺蘇民祭」があげ
られております。

岡山歴研も設立五周年という節目
として、記念総会を迎えようとしてお
ります。ご審議いただき議案には初め
ての会費値上げもあり、会員の皆様にご
理解いただければならないものであり
ます。

記念講演では、津山出身の東京大
学山本博文先生をお迎えして武士の世
界をお話いただくとともに、地元から
植田心壮先生にお話いただくことを予
定しております。

岡山歴研の次の五年後、一〇年後
に向けて、運営体制を整備しなければ
ならない時であります。皆様のご協力
をよろしく願いたします。

(会長 天野勝昭)

江戸後期の和製ダ・ヴィンチ

小野光右衛門

金光図書館長 金光英子(会員)

小野光右衛門は、天明五年(一八一五)備中国大谷村(現山口県小野町)の庄屋、小野本兵衛の後継として生まれた。十二歳の時、父を亡くすも、後を継いで十七歳で庄屋役となった。以来、庄屋役、大庄屋を五十六年間務めた。大谷村だけでなく近隣の村々にも大きな影響を与えた人である。

また、和算に精通し、『啓迪(てい)』算法指南大成』という和算の著書を出版した。暦数についても精しく、土御門家(かどみけ)



▶小野光右衛門肖像画(部分)
(岡山県立博物館蔵)

の依頼で出仕している。さらに幕府の天文方と手紙でやり取りするなど、天文の知識も持ち合わせていた。また測量や地図作成についても顕著な才能を発揮した。村人や家族に慕われ、子弟の教育にも力を注いだ。様々な分野に業績を残し、さながらダ・ヴィンチのような人物であった。

天保五年(一八三四)には、大庄屋格に就任した。更に同十一年(一八四〇)には、大庄屋本役となり、住居を領主の役所に近い賀陽郡井手村字川崎(かわさき)に移した。この後、弘化二年(一八四一)には、福井村(現福井市)の庄屋を兼ねるなどして、安政四年(一八五三)の八月まで大庄屋役を務めた。その翌年、安政五年十月、井手村で没し、大谷村の小野家の墓地に葬られた。

境界論争

光右衛門が庄屋になってほどなく、文化二年、隣村黒崎村との境界論争が起きた。光右衛門が二十一歳の時のこと。天領の黒崎村の横車に対して、理を通して少しも譲らず、ついに翌文化三年には江戸に訴える

決意を固めた。そのことで光右衛門が大坂まで行った時、黒崎村はこれを察知し、和議を求めてきた。これによりこの事件は解決した。この事件を解決したことで、光右衛門の名は内外に知られることとなった。

小野家破産

村民に慕われていたことは、文政二年、光右衛門三十五歳の時、小野家破産という事態の中でも窺われる。光右衛門が庄屋を引き継いだ当時の村の年間経費は、銀七貫匁余という中で、借金は四貫五〇〇匁もあつた。文化五年には氏神社の新規建立、同六年には寂光院の造作、同十五年には他村との訴訟事件などがあり、また、木綿の不作、うんかの被害なども相次ぎ、大谷村はその度に新たな借金を背負いこむこととなり村の財政はほとんど破綻をきたしていた。この折、光右衛門は村内の農民から取り立てをしなかつたので小野家の維持が不可能となり、文政三年の村の収支決算をすませた後、十二月十六日に家を捨てて吉備津神社の神官の堀家光政を頼って大谷村を後にした。春になったら妻子をつれて、かつて知りあつていた江戸幕府の天文方手伝の山本文之進を訪ねて仕官するつもりであつたという。

このことを知った村人たちは判頭が、またあるときには年寄りの代理が、あるいは総代や縁者などが、一日二日おきに光右衛門を訪ね、再三再四帰村を求めた。光右衛門は、借金の支払いの目途がたたないと



▲小野邸母屋跡(金光教本部所有)

ころからこれらの願いを断り続けていた。

一方、大谷村ではみんなが評議をし、田畑や屋敷内外の立木を処分するなど借金の整理を進めた。立木の整理にあつては、同じ地区の者は全員五日間の奉仕をし、それを聞き伝えた村の者も次第にかけつけ、その数は数十人にも及んだ。それ故、ほどなく借金の支払いの目途をつけることができた。そこで光右衛門は十二月二十七日に帰村し、再び庄屋の働きを進めることとなった。

里見川訴訟

光右衛門は大谷村のみならず、時田領全体にかかわる功績も大なるものがあつた。その一つは文化十年(一八三三)からはじまつた里見川に関する訴訟事件である。この川



▲光右衛門が使っていたコンパス

は大谷村の北端を東西に流れ、河口の川口でもない。

付近は天領の阿賀崎新田村である。長い年月のあいだに下流に土砂が積み、洲ができしたが、そこを開墾して耕作地を作ったのである。そのため、大雨の度に占見新田村や八重村の田が冠水することになった。このことから、阿賀崎新田村と里見川に關係する二十五カ村との間で訴訟事件がおきた。この時、光右衛門は村の代表者として事の処理に当たるとともに、文化十四年(三十三)には、江戸まで行き二十五カ村の代表としてこの事件の解決に尽力したのである。結果は各村総出の浚渫工事となったが、川底に堆積した土砂の量をはかる測量は、数学が得意な光右衛門が関わったことはいま

鉄穴(な)事件

弘化三年(一八四六)に、鉄穴(な)事件がおきた。鉄穴流しという製鉄方法がある。これは、土砂を水で流し、比重差によって砂鉄と土砂とを選別する方法である。そこで問題となるのは、流された後の残土を含んだ水である。光右衛門は天保元年(一八三〇)から湛井にある十二カ郷用水の樋の本支配という役に任命されていた。十二カ郷用水というのは、平安時代、妹尾兼康の手によって造られたと伝えられる用水で、総社市の湛井に堰を作り、高梁川の水を分岐させ、その下流の十二の郷、六十八カ村を潤すという西日本でも有数の農業用水である。この用水に鉄穴流しの土砂水が流れ込み、農業に支障をきたすことになり、上流の採鉱側と十二カ郷用水側とで紛争が起きた。この時も光右衛門は先頭に立ち、江戸公事をおこした。春の彼岸から秋の彼岸までの用水引取期間については、鉄穴流しを中止することとこの事件は落着いた。その他、嘉永六年(一八五三)には、賀陽郡奥坂村にかかわる九カ郷の用悪水路の事件も、その代表者としてその解決に尽力した。

新田開発

さらに、光右衛門は新田開発も手がけた。天保元年(一八三〇)には大谷村の夕崎に、沼に手を加えて新池を作り、新田を開墾して



▲位置関係略図

いる。そのため、その地区では二倍の収穫を得ることができるようになった。また、嘉永三年(一八五〇)には賀陽郡井尻野村(現市)に新たな用水路を作り、八町歩(約八百)の田地が開墾された。安政三年(一八五八)、年貢増額のため、検地帳の手直しが行われることとなった。このため、領内は騒然となったが、光右衛門は領主と農民の間に立ち、その矢面に立った。光右衛門は各村々を巡って、十のうち一、二を出して事をすませたという。

和算暦象

光右衛門は、和算(日本で発達した算術)と暦象(暦と天体の運行)に秀でており、学者でもあった。特に若い頃から数学を好んでいて、当時名著として聞こえていた沢口一之の「古今算法」や、佐藤茂春の「算法大元指南」などの和算の本を買って求めて独学で身に付けた。幸い、文化六年(一八二五)に後月郡大江村(現)で龍岡舎という塾を開いた谷東平を師とすることができ、光右衛門はこの谷の塾へ足繁く通い、ついに師匠を越えたと



▲測量具

いわれている。

先述したように、文政十四年三月に里見川にかかわる紛争のため、光右衛門は江戸へ出たが、その訴訟の間をみて幕府の天文方、渋川景佑(かきやすわ)の門をたたいた。景佑は暦算、和・漢・蘭の諸学に通じ、また天保の改暦の立役者として活躍し、当時の日本暦学界の第一人者として知られていた。そして、その高弟の因州侯の家臣で「暦作り御用手伝い」を勤めていた山本文之進を師として、天文暦術を学んでいる。山本とは気が合ったようで、大谷村に帰ってからも暦学問答を戦わせた。その手紙が何通も残されている。それにより、故光右衛門は、天文・暦象・和算に関する大家として、しだいに近郷に知られたっていった。

家相占い方角

光右衛門が大庄屋格に任命されたのも、領主の井手の陣屋が焼失した際、方角や家相の第一人者として絵図面を整えてよく調べ、普請役として働いたその功が認められ

たからであった。

やがて彼の名声は、京都の土御門家(つちみかど)にも知れることとなった。土御門家というのは、平安時代に安倍晴明から出たものとされ、幕末まで陰陽の頭(陰陽道の長官)を代々つとめた家である。江戸時代に入り、天文、暦に関する実際的なことは幕府の天文方の手に移ってはいしたが、形式的にはそれらを管理していたのは依然として土御門家であった。この家は、天文・暦術・日取り・方位の吉凶、占いに関することについては、宮廷や幕府に対し伝統的な力を及ぼすとともに、民間の卜占(おまじ)・祈祷・加持などを仕事としている、いわゆる陰陽師たちの総元締めとして君臨していたのである。

この土御門家が光右衛門の入門を求めたのである。しかし光右衛門は、公的仕



▲小野家墓地

事を理由に一度は断った。しかし、土御門家はあきらめず、領主を介して入門を求めてきた。そのため、光右衛門は天保十四年(一八四三)に土御門家の入門状を受けることとなった。そのため、嘉永三年(一八五〇)には土御門家の要請により京都へ上り、同家から袴・紋付一具、また盃・短冊などを拝領している。このことから光右衛門は土御門家からも一目置かれていたことがわかる。

和算の入門書出版

さらに光右衛門の才能を聞きつけた出版社は和算の本を出版したいと持ちかけてきた。当時和算の入門書は二冊しかなく、なかなか手に入りにくくなったというのが出版社の言い分である。当時は執筆者の経済的負担も多く、失敗するとそのつけは莫大なものになってしまうので一旦は断った。しかし、入門書がないことを百も承知の光右衛門は、和算の本を執筆することに同意することとなる。嘉永五年(一八五二)に一応原稿を提出した。さらに付録一卷を付すことになり、それを加え、同七年(一八五四)に計六巻を出版することとなった。

出版者は光右衛門の他、大坂心斎橋筋の秋田屋太右衛門と、倉敷の太田屋六蔵、京都の天王寺屋一郎兵衛の四人で、財務的な事まで含めた規約を作り、出版の準備を進めている。もともとそれほど売れる内容の本ではなかったが、結果的には、当初千部

印刷したが足らず、再版を重ね、千七百部が発行されるに至った。

算額

光右衛門にかかわる算額がある。算額とは、和算家が数学の問題を説き、神社・仏閣に絵馬として奉納したものをいう。これは普通、神仏に感謝の意を表すと共に、数学の問題を説き、広く世に発表するという意図もあった。

光右衛門に関係する算額の一つは嘉永六年(一八五三)のもので、総社宮(市郡)に奉納されており、光右衛門の門下生高木紋吉郎他の者が六問を解答しているものである。今一つは、安政五年(一八五八)のもので、吉備津神社(市郡)に奉納されているものである。これは、光右衛門の門人が四問を解答しているものである。塾の絵も描かれている大きな算額である。何れも小野以正(光右衛門の息子)の名前が記されているめずらしいものである。

教育者光右衛門

光右衛門は多くの弟子を育て、子女の教育にも力を入れている。そのことを示すものとして、金光教祖のことについて触れておこう。金光教祖はその著書「金光大神御覚書」に、

「津の庄屋小野光右衛門様に

て、手習いさしておもらい。

私十三、十四、戊亥と二か年。」

と記している。このことから、村内の



▶小野光右衛門の墓

十三、四歳の名もない農民の願いを受け、その教育に力を尽くしていることが窺える。この時には、童子教、実語教を教えたと伝えられている。おそらく他の寺子屋と同様に、読み・書き・そろばんの他、道徳に関する教育もしていたことであろう。この時光右衛門は、四十二〜三歳であった。金光教祖が後年「金光大神御覚書」「お知らせ事覚帳」などを著すことができたのも、金光教祖のもとを訪ねてくる信者に対しての理解が早く、故事やことわざ等が豊富なことも光右衛門の薫陶によるものがその基本にあったといわれている。金光教祖が毎月一日、十五日、二十八日の月の式日に光右衛門の墓前の参拝を欠かしたことがないということも、光右衛門の人柄をしのぶ伝えの一つである。

なお、光右衛門の娘柳は、三島中洲の母である。光右衛門は、孫の中洲に山田方谷を紹介し、学ぶように導いた。方谷も光右衛門を尊敬し画賛で讃えている。方谷も中洲もそして光右衛門に触れた多くの人々がその薫陶を受けている。

ロシア革命難民の子供達を 保護して帰郷させた人道的船長

茅原基治

(一八八五～一九四二・八・一八)

茅原基治は、小田郡甲弩(のう)村楠(笠岡市甲弩・矢掛町・井原市に近い)の茅原正太郎の次男として明治一八年に生まれました。

北川尋常小学校を卒業し、明治三十二年(一八九九)旧制金光中学校へ入学、明治三十六年(一九〇三)に卒業しました。同校を卒業後、水夫として船舶業に就職、苦勞して後に船長試験にも合格しました。その後、神戸市所在の勝田汽船(大洋日本汽船(株)の貨物船の船長に就任しました。

大正六年(一九一七)帝政ロシアでは、二月

この混乱の中でひどい食料難に陥り、政

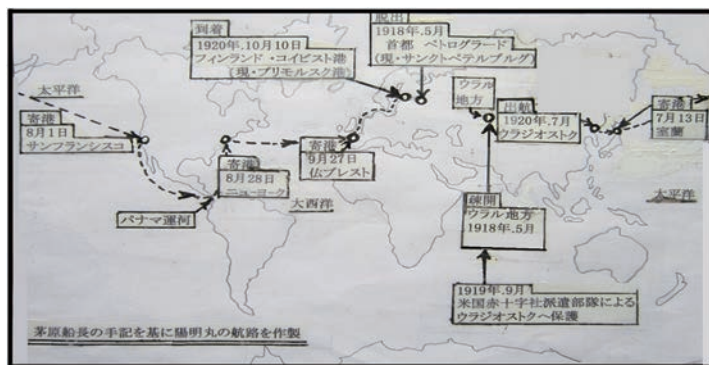
治船長でした。

勝田社長と茅原船長は、ロシア人の子供・婦人、米國赤十字社社員など約千人を、救出する為、貨物船「陽明丸」(二万一千トン)を、急遽(きんぐ)客船に改造し(手記には、米國赤十字社の人道的支援の事、任侠に富める勝田社長の多額の材料寄付の事、そして大阪鉄工所因島工場の犠牲的奉仕で立派に改造された事が記録されております。)煙突に赤十字、マストに星条旗、船尾に日章旗を付けて、神戸からウラジオストクまで回送しました。

大正九年(一九二〇)七月九日陽明丸は、ウラジオストク港からロシア人の子供七十九名(少年四二八人、少女三五一人)、ロシア人婦人八七名、兵士七七名、米國赤十字社員一六名、米國YMCA派遣員一名、の計九六〇人と乗組員(約六〇名)を乗船させ出航しました。

当初は、インド洋からスエズ運河を通り抜けてフランスへの最短航路を航海する予定でしたが、年少者の健康上、真夏のインド洋を避け、太平洋を横断してサンフランシスコに寄港、パナマ運河を通り抜ける東廻りの航路を選択しました。(下図参照)

同年(一九二〇)七月一三日には、北海道室蘭港に入港したものの、現地当局には敵國ロシアの子供達等の上陸を拒否する者もありましたが、茅原船長の尽力で子供達を上陸させて、市内の小学校で茶菓子を供し、地元学童の柔剣道の試合を見せるなど交歓を行いました。



▲陽明丸の航路図

陽明丸は同港で燃料、食料、医療品等を補給して、七月一六日サンフランシスコを、目指して出航しました。ロシア人と日本人船員との会話が通じない等、船内は大混乱していました。茅原船長は、救命胴衣の訓練や保健衛生の徹底の他、映画やダンス、綱引きなどの娯楽を実施して、徐々に子供達と船員の親交が持てるように計らいました。

八月五日サンフランシスコを出航してパナマ運河を通過、八月二八日にニューヨークに寄港、同地で五〇日間滞在しました。その間八月三十一日の天長節(天皇誕生日)の日に陽明丸が日章旗を星条旗より上に掲



▶茅原基治

げた事に地元警察等から「米国旗を侮辱（くじょう）した」と抗議された事、子供一七名が集団脱走した事、一四歳の少年が衛兵の銃暴発で死亡した事、一六歳の少女が病死した事等の不祥事がありました。一方、在米邦人から義援金約五二九ドルや慰問品が寄せられるなど概ね友好的に移りしました。同港から大西洋を横断して九月二七日にフランス・ブレスト港に寄港し、一〇月一〇日には、フィンランドのコイビスト（プリモルスク）港に到着して、世界約半周の三カ月間に及ぶ航海は終了し、下船した子供達は、その後ロシアの親元に無事引き取られました。

戦前戦後、茅原船長の人道支援は長く忘れ去られていましたが、平成二一年に救出されたロシア人の子供の孫にあたるオルガ・モルキナ（英語講師、ロシア難民子供の子孫の会代表）、というロシア人女性が、ロシアを訪れていた北室南苑（金沢市在住

の書家）と会い、茅原船長の子孫を探している事を強く告げた為、北室は、茅原船長の消息を調べるとともに、モルキナの来日の手助けをしました。

この出来事をインターネットで知った南山高校・中学校男子部（名古屋市中）の生徒は、学校側と話し合い承諾をして頂き、授業の一環としてモルキナを招待し南山高校で茅原船長に祖父が救われた事についての講演を行う事になりました。

平成二三年（二〇二一）一〇月二六日に講演は実現し、翌日、一〇月二七日には、笠岡市甲弩楠を訪れて茅原基治船長の墓参も実現しました。

この一連の経緯については、新聞各紙が「九〇年前日本船が救った子供八〇〇人（産経新聞）」「日本人船長の功績に光」（朝日新聞）等の表題で報道して一挙にクロウズアップされました。この人道支援は、勿論、茅原船長だけでなく、勝田社長の英断、米

国赤十字社や陽明丸船員の献身的な行為でなされたものですが、幾度の困難を克服して難民を救済した茅原船長の功績は後世に残るものです。

茅原船長は、実直な性格で、出身校の金光中学校の佐藤範雄校長（初代）に後年まで年賀状を出し続け、昭和九年（一九三四）には「赤色革命余話・露西亞小兒團輸送記」（金光図書館所蔵）と題する手記を年賀状代わりに作成し贈呈しています。

この手記には、ロシアの子供達の輸送時の苦労が克明に記録されており、茅原船長の公平で人類愛に満ちた人物を窺（うかが）う事ができます。

冊子「北川の人物と孫たちに語り継ぎたい人々」（発行：北川まちづくり協議会、編集：北川の昔を訪ねる会）より転載

《参考資料》

北室南苑（書家）・NPO法人顕彰会

岡さんから「説明された内容を音声に録音し、文章におこされたら簡単です」会場から「成程！さすが岡さん」との声が。

鼎談を聴いて

楠 敏明（運営委員）

小説家の出発点は、富久さんはポケ防止、岡さんは自分を取り巻く状況から、そして静岡県出身の平茂さんは岡

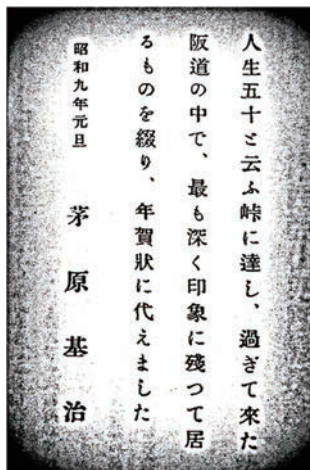
第十三回歴研サロン

歴史小説創作の苦心と喜び

——歴史小説家による鼎談——

二月二八日、小説家の富久豊氏、岡将男氏、平茂寛（本名：佐藤和久）氏による「歴史小説創作の苦心と喜び」と題する鼎談が行われた。三三名が参加。

二月二八日、小説家の富久豊氏、岡将男氏、平茂寛（本名：佐藤和久）氏による「歴史小説創作の苦心と喜び」と題する鼎談が行われた。三三名が参加。



▶《手記》赤色革命余話・露西亞小兒團輸送記（縦一八cm 横一三cm 五三頁）



山陽新聞記事（平成二三年十月）、産経新聞記事（平成二三年六月）、共同通信「人欄」（平成二五年十一月）、神戸新聞記事（平成二六年一月）朝日新聞記事（平成二三年九月）

北國新聞記事（平成二三年二月、九月、十月）室蘭民報記事（平成二二年五月、平成二三年九月、十月、十一月、平成二二年九月）

TV（BS朝日 平成二三年三月）（北陸朝日 平成二四年六月、平成二五年六月）ラジオ（NHKラジオ国際放送）

山への恩返しだという。スタートは三人とも歴史的文章の中の、気を引く「二行」が、あるいは「二十行」が、また一人の気になる人物がきっかけで書き始めたと言う。私の専門の生物化学現象のなぜ起きたのかと驚くことに似ている。想像力、五感を働かせて書くとのこと。将に人間力である。人物を創り上げ、書きあげていくのが楽しめと異口同音。



▲左から、平茂寛、富久豊、岡将男の三氏

資料については、富久さんは古事記、日本書紀、続日本書紀を何度も読み返すという。岡さんは一次資料を読めるようになりたいという。大方は二次資料から得た資料をもとにして書くとのこと。ただ、人間関係を書く場合、自分のこれまでの経験を参考にして書きあげる。

文体について、富久さんは手で書き、事柄、場面に合った字を探すという。例えば簡単な「みる」についても、見、診、観、看、視等日本語にはいろいろある。平茂氏は読みやすさを考えて書くという。三人とも章を立てて書く。岡氏が書いた内田百閒は学生の頃、俳句をやっていたのが文章の組み立てに大きく影響していると岡氏は分析する。

古代を書く富久氏にとって、古代をかくとなるとどうしても天皇について書かざるを得ない。行き過ぎがないように躊躇する

場面が出てくるという。

これからについて、富久氏は子供たちに日本の歴史を知ってもらうために書いていきたいと結んだ。

三氏の主な著書

富久 豊氏

・『滅びの音(こゝろ)』新風舎、・『闇人』文芸社、・『闇人II』文芸社

岡 将男氏

・『岡山の内田百閒』日本文教出版、・『吉備邪馬台国東遷説』吉備人出版

平茂 寛氏

・『隈取絵師』朝日新聞出版、・『暴れ茶人 無頼剣』学研M文庫、・『悪采師』朝日新聞出版、・『とっぱあ互力(二)』(二)『火事場の華』富士見新時代小説文庫、・『ねばけ医者 月を斬る』招き猫文庫

第十三回探訪会新春ウオーク

西川・枝川緑道公園

屠蘇気分冷めやらぬ一月十日、新春ウオークが岡山市内の西川・枝川緑道公園で行われた。二五名の参加。案内は岡山市観光ボランティアの磯島会長、倉田氏、華山氏のベテランガイド三人。これに備前市観光ガイドの片山会長、倉敷市観光ガイドの神崎会長も参加した。

南方の西川公園を起点に、枝川公園迄の

中とは思えない光景が続く。

出発して七百米程下ると丹頂鶴をデザインした青柳橋が両翼を広げて迎えてくれる。更に下ると両岸には飲食店、ショップ、客確保のため十六時入店なら食事代は半額という店もある。戦後まもなくに建てられた川沿いの岡ビルは今でも岡山市民の台所として健在。桃太郎大通りを挟む西川橋では犬、猿、雉、桃太郎の擬宝珠が飾られている。宇喜多家菩提寺の光珍寺にお参りし、

セントラルホテル内の旧杉山邸和室にあり杉山真子専務(おふくの会会長)から、岡山近代産業発展に尽力された杉山岩三郎の話を伺う。ホテルの玄関には戦火に耐えた楠が凛と立ち、木肌に触れると強さと優しさが伝わる。ゴールは枝川公園の噴水広場、十数個の巨石の石組みは庄巻。岡山市民でも知らない人がいるとのこと。倉敷市民の私は何かを得た気がした。約二時間、歩き通した後の打ち上げで呑んだ岡山産のビールは最高。桜の頃、新緑の頃また行ってみよう。

(運営委員 工藤博)



▲光珍寺にて記念写真

新春ウオーク案内記 西川・枝川緑道公園

岡山市観光ボランティア活動連絡会ガイド 倉田範生

昨年の十月、石尾副会長から西川緑道公園探訪ウオークのガイド要請がありました。岡山が全国に自慢できる緑道公園をぜひ身近に実感してもらいたい、喜んでお引き受けしました。西川は江戸時代初期に岡山藩主池田忠雄が開削したものを、昭和四十九年から九十年をかけて緑道公園として整備し、昭和五十六年には「緑の都市賞」を受賞、平成十八年には「日本疎水百選」に指定されました。

当日は、西川上流のキラメキプラザ付近に約三十名が集合し、三班に分かれて十時に出発しました。案内箇所は五十カ所余ありましたがメインの西川の流れの途中には、江戸時代に十二の橋が架かっていたことは知られています。南方公園付近が一ノ橋で勘解由橋とも呼ばれていましたが現在万町跨線橋の下です。二ノ橋は現青柳橋で旧山陽道が通っています。欄干にはタンチョウ(鶴)がデザインされた。案内する倉田範生さん



案内する倉田範生さん



▲左から 石尾陽子副会長・磯島善将様・倉田範生様・華山泰道様

▶セントラルホテル内の旧杉山邸和室で杉山真子専務が説明

野田屋町公園で福田英子女史(女性解放運動家)の碑を見て、光珍寺では石渡住職の宇喜多家菩提寺としての講話をしていただきました。七ノ橋(出石橋)前のセントラルホテル内の旧杉山家和室を見学して、杉山真子専務様から勝海舟、伊藤博文、大隈重信等幕末から明治の名士が

お知らせ 第十四回

歴研サロン

乞食行脚の僧、良寛を憶う

講師 中山亘氏(会員)
日時 五月一九日(木) 十三時半
場所 きらめきプラザ二階大会議室

(旧国立病院跡)
参加費 会員・一般とも 五百円
定員 六十名・要申込(事務局)

●会員の出版物紹介●

(過去1年以内)

『ねばけ医者 月を斬る』

平茂寛著

招き猫文庫

『現地探訪 二宮金次郎は
生きている』

植田心壮著

日本文教出版(株)

『中国地方の鉄道探見』

岡將男共著

(社団)中国地方総合研
究センター

「北川の人物～孫たちに
語り継ぎたい人々～」

発行：北川まちづくり協議会

編集：北川の昔を訪ねる会

編集委員会代表

森山上志氏(会員)

■編集後記■

江戸後期、備中の田舎で、まして幼くして父を失くした中での小野光右衛門の好奇心、探究心には只々驚くばかりです。同時に、日本でも和算、暦学、天文学がかなり進んでいたことも驚きです。世界的にはノーベルがダイナマイトの開発に没頭していた時代です。

共産主義、帝国主義が渦巻く中の大正九年、茅原基治船長の人の息使いが感じられる行為に感動しました。笠岡にある北川まちづくり協議会発行の冊子「北川の人物」から承諾の上、掲載しました。(楠)

発行 岡山歴史研究会

会長 天野勝昭

編集長 楠敏明

事務局 〒701-11332

岡山市北区平山844-86山本方

電話 086・287・6226

